

山家藩 谷氏の家臣・村岡家

広瀬町の墓を東京の子孫が訪問

由良川に面した明るい斜面に田園風景が広がる広瀬町の集落。その東端、濃い常緑のヒノキに囲まれた高台の共同墓地の中に「村岡典猷之墓」と刻まれた墓石がある。村岡家は山家藩主の谷氏に代々仕えた家臣の家系。墓に葬られた村岡典猷が、戦前に活躍した日本思想史学者・村岡典嗣の祖父であることは知られていた。しかし墓の建立の背景など、詳細は明らかでなかった。昨年になって東京都に住む村岡家の子孫の協力が得られ、明治維新前後の激動を秘めた、この墓を巡る大きな物語が見えてきた。

【朝倉聡】

墓の裏面の碑文から（引用注・実際には典猷と読み取れるのは、幕末「典猷」之墓とのみ刻んに他界した村岡典猷である墓碑をさぐりあり（1821〜60）の墓をた。略その学友、長男の典安（1849馬淵浩二君も近々世を去った。（略）まさに往代に建てたこと、そして典安の子が、日本思想史学の開拓者として早稲田大学教授や東北帝国大学（当時）教授を歴任した典嗣（1884〜1946）であることだった。典猷の死後、山家から東京に移住した典安の子として浅草に生まれた典嗣は著書「本居宣長」日本思想史研究などで知られる。

次いで09年には、「吾に覆われた典猷の墓を山家今昔写真の会（有道大作会長）の有志が清掃し、碑文を判読した」という趣旨の記事を本紙が掲載。本紙のホームページに転載していたその要旨をインターネット検索で見つけ、昨夏に典猷の墓への墓参を実現したのが、村岡家の子孫で東京都文京区の開業医・村岡洋典さん（43）だった（本紙昨年8月2日付参照）。

墓清掃のネット記事が橋渡し



2009年7月16日、「村岡典猷之墓」に花を手向けた山家今昔写真の会の有志たち（「あやべ市民新聞」同年7月20日付より）

武術の家系を襲った悲劇

洋典さんの来縁以降、文献だけでは分からない村岡家の言い伝えをお聞きすることができ、同家に伝わる史料や写真の提供にも尽力いただいた。

「口伝ではありますが、村岡家の古い先祖は平家の家臣で、壇ノ浦の戦いで敗れた後、追手の届かない丹波篠山の地に隠遁したと伝わります」と洋典さん。

典猷の墓の碑文にも「平姓村岡氏」とある。その後、村岡家は山家藩に仕え、武術師範として仕えただけでなく、典猷は山家藩の家老職（勘定奉行）を務めたという。



村岡家に伝わる「鎗術」や「砲術」の指南書の一部分。村岡培茂や村岡典猷の名も記される（村岡洋典さん提供）

陸軍士官学校を断念し酪農家に

明治時代に活躍した酪農家などの伝記「日本牧牛家實伝」（金田耕平著、1886年）が、「国立国会図書館デジタルコレクション」(https://dl.ndl.go.jp)で公開され閲覧できる。その中に典安の伝記「村岡典安氏實伝」が含まれる。

典安は、まだ鉄道も開通しない中で山家から一途、東京に向かった。藩の兵制改革に貢献した。しかし、幼時に木砲術に至るまで一とし、父の死から10年余りを経て成人していた典安は、まだ鉄道も開通しない中で山家から一途、東京に向かった。

典安は、まだ鉄道も開通しない中で山家から一途、東京に向かった。藩の兵制改革に貢献した。しかし、幼時に木砲術に至るまで一とし、父の死から10年余りを経て成人していた典安は、まだ鉄道も開通しない中で山家から一途、東京に向かった。

デンマークからホルスタイン輸入

「典安はデンマークからホルスタインを数頭輸入して酪農を始めた」と伝わり「洋典さん」。



共同墓地の一角にある「村岡典猷之墓」（広瀬町で）

「氏は丹波の人なり」と書き起される典安の「實伝」によると、山家で生まれ育ち「幼にして慧悟、人を驚かす」という明敏さを見



金田耕平著「日本牧牛家實伝」に収録されている村岡典安の肖像＝「国立国会図書館デジタルコレクション」より(https://dl.ndl.go.jp)



昨年9月、村岡典猷など先祖の墓を訪れた村岡洋一さん（右）と洋典さん。広瀬町で、村岡洋典さん提供

激動の時代生きた山家出身の村岡典安